

ディケンズの『デイヴィッド・コパーフィールド』における時間

福島 光 義

外国語第2研究室

Time in Dickens' *David Copperfield*

Mitsuyoshi FUKUSHIMA

English

Abstract

David Copperfield (1849-50) is an autobiographical novel which is narrated by the hero David. Time in this novel will be discussed in connection with Dickens' traumatic experiences, identity, writing, and memory. As the narrator says, "this narrative is my [his] written memory." David narrates his birth (by hearsay), childhood, school days and matrimony, with his "good memory" and "close observation." The hero's feelings of love and hate, happiness and misery, pride and shame are frankly recollected through the first person narrative. For example, in chapter 9, when David is told of his mother's death, Dickens accurately and retrospectively describes the sense of loss of the bereaved. In this scene, not only grief, but the conscious recognition of grief is recounted with Dickens' unique recollective technique.

According to J. Hillis Miller, this work is "a novel of memory." Thus, this paper mainly deals with the nature and means of memory, the role of memory in psychic growth, and the process of remembering.

The hero involuntarily remembers the past through the senses of touch, smell etc. This method is often used by Dickens to invoke recollections, in a manner similar to Proust. However, unlike Proust, Dickens' past cannot be recaptured. The difference and similarities between the two writers will be examined.

I

David Copperfield (1849–50) は、自伝的色彩の濃い、主人公をめぐる家庭の崩壊と再構築を盛り込んだ“domestic novel”の要素も兼ね備えた Bildungsroman⁽¹⁾であり、又主人公の成功譚でもあるということは周知のことである。*David Copperfield* 批評は、伝記的⁽²⁾なもの、今世紀支配的であった心理的・精神分析的⁽³⁾なものに二分される。

作者 Dickens の少年期の Warren’s Blacking Warehouse における過酷な体験が、trauma となって生涯彼を悩まし続け、Dickens の作品は、幼い頃のこういった衝撃や苦難やその原因説明に向けられているという Edmund Wilson⁽⁴⁾ の解釈は、未だに充分示唆的で刺激的ですらある。しかし、Wilson のこの trauma 解釈は偏重であるとする批判もある。⁽⁵⁾

最近の *David Copperfield* に関する研究には、trauma を作品創作に過度に結び付けるのではなく、“more sophisticated analyses”⁽⁶⁾ が認められるようになってきた。社会的、政治的な関わりの立場から論じているものも少なくない。例えば、John O. Jordan は、Dickens の“social novelist”としての成長を見、*Little Dorrit* (1857) や *Bleak House* (1852–3) のような作品における社会批判ほど歴然とはしていないが、*David Copperfield* にも社会的なテーマや歴史が抑圧されてはいるが、欠落してないことを指摘し、またこの小説のために social sub-text を取り戻そうとしている。⁽⁷⁾

David のアイデンティティについての言及も散見される。例えば、John Lucas は David がその“earnestness”によって“mature identity”⁽⁸⁾ を形成するようになったことについて、作者が深い理解をもってたと指摘している。社会の中でのアイデンティティ確立ということである。また、David Kellogg は、Copperfield の“act (s) of writing”と“the collisions of self and society”を関連付けて論じている。⁽⁹⁾ 要約すると、David は心理的にも社会的にも傷つき、心の治療と社会的財政的栄達改善を求めて書き、それによって、彼の社会的“position”は上がるが、彼の私生活のほうは扱われない、そこで、心の治療のためにその自伝を書くが、“novel-writing”は作者を社会的に安定した地位に定着させ、もはや“public life”を無視できなくなる、ということになる。David はものを書くことの動機づけにまつわる矛盾にぶつかる。結局、「自伝としての *Copperfield* は、書くことによって、公的に関与するようになった生活を、全く同じ書くことによって、再度私的なものにしてしようとしている。」⁽¹⁰⁾ その意図は、David が物語る中で、novel という言葉をなるべく避けて、“a manuscript” “a paper” “a document” “a number of pages” などという表現を故意に使用している⁽¹¹⁾ ことから察せられる。しかし、読者は、この物語が novelist Dickens によって書かれた“a novel about a novelist”⁽¹²⁾ であることを忘れることは出来ない。

David という書き手は公刊されるのを望んではいなかったことになっているが、もう一人の書き手 Dickens によって読者に公表される。ついにその Memorial を完成しえなかったこの作品の中の登場人物の一人である Mr. Dick と較べると、David は人生の試練を書き得て幸せであったかもしれない。

この作品を評する場合に、J. Hillis Miller, Alexander Welsh, それに Stanley Friedman らの指摘する、⁽¹³⁾“religious motifs” の意義も、Agnes Wickfield などを考える時、考慮する必要がある。

Dickens における時間観・時間意識やその芸術的表現は *David Copperfield* だけに限らず、*The Old Curiosity Shop* (1840-41) から *The Mystery of Edwin Drood* (1870) に至るほとんどすべての作品に認められる。⁽¹⁴⁾ この作品における trauma, self and society, identity, writing それに religious motif などの問題は、「時間」を抜きには語れないし、これに結び付けてこそ解き明かされるものである。

語り手 David が、“this narrative is my written memory” (p. 817) ⁽¹⁵⁾ であるといっている通り、*David Copperfield* は彼の個人的な記録、まさに “The Personal History” である。J. Hillis Miller の言を借りれば “a novel of memory”⁽¹⁶⁾ ということになる。この作品は、自伝的作品の通例として、主人公の誕生、幼少年期、学校時代、友情、恋愛、結婚といった “life cycle” の中に、主人公の愛憎、喜怒哀楽、幸・不幸、誇りと恥辱、近親者・友人の死への思いといったものが、思い出・追憶といった回想形式をもって表現されている。*David Copperfield* はただ単に涙と笑いの半生を綴ったものでないのは既に明らかである。この作品の特色は、“a novel of memory” であるに止まらず、“narrator” によって回想された世界を「記憶する過程」 (“the process of remembering”) ⁽¹⁷⁾ が明かされている点にある。

そこで、小論では、この作品における、時間意識や記憶の過程といったものと作者及び語り手・主人公との関係、それに時の移ろいの中での真偽・善悪の顕在化と主人公の受難・精神的成長といったものを扱う事とする。

II

語り手 David は、先ず、第1章の “Whether I shall turn out to be the hero of my own life, or whether that station will be held by anybody else, these pages must show.” という冒頭の文で、彼自身が “hero” になるのか否かということに自ら疑いをかけている。この自問には、自己本位に向かう姿勢とそれを避けようとするやや控え目な自信のない態度とが奇妙に入り交じった、“a fusion of self-centeredness and self-effacement”⁽¹⁸⁾ が見られ、読者を当惑させる。また “hero” という言葉自体、romantic な意味合いでのことなのか、劇の主役のような意味合いでのことなのか、曖昧である。しかし、“these pages

must show”とあるように、誰を中心にした話であるかは、読み進めるうちに自ずと判明してくる。この一文が置かれている意義は、既に半生を生きてきた語り手の存在が感じられることにある。この冒頭の文に窺われる語り手の控え目な態度は一貫している。例えば、語り手は自分のことを、最終章から2番目の、第63章で、Mr. Peggoty がオーストラリアからもってきた新聞に掲載された Mr. Micawber の手になる記事という形で、“The eminent authour”と間接的に表現している。こういった語り手の控え目な抑制のきいた語り口があるからこそ、読者は、最後まで読み進めることができるのである。

続く第2、3番目の文では、余りに平凡な語り口で自分の生まれ落ちた曜日と時刻が、伝聞の形で、“To begin my life with the beginning of my life, I record that I was born (as I have been informed and believe) on a Friday, at twelve o'clock at night. It was remarked that the clock began to strike, and I began to cry, simultaneously.”と書き記される。mortal なものである David のこの世での存在は、夜中の12時という「時」とともに始まったのである。ここには、「人生を時間の相の下に把握しようとする試みへの第一歩」(“the first step in any attempt to grasp life *sub specie temporis*”) ⁽¹⁹⁾が見られる。時の流れの中に生存し始めたというのが大事なのであって、生年月日は記述されていない。ここでの語り手のメッセージは、自分が、金曜日の12時という何やら不吉そうな響きをもつ日に生まれ落ちたということなのである。*Great Expectations* (1861)では、その物語の始まりは、語り手・主人公の Pip が物心つく、即ちその“first most vivid and broad impression of the identity of things”⁽²⁰⁾が得られる頃からである。意図的か偶然か、David がどこで生れたかという「場所」のことは、ここでは記述されず、後回しにされる。

続く3つのパラグラフで、金曜日の真夜中に生れた子は、一生不幸な運命を持っているとか、幽霊や化け物を見られる特権があるとか、David が生れたとき着けていた“caul”（出産時に時々胎児の頭を被っている羊膜の一部、これを持つものは溺死しないという迷信があった）が、15ギニーで売るといった広告が出たとかいう出生時の自分を取り巻く周辺の話がなされる。

この寄り道の後、次の段落で、漸く、“I was born at Blunderstone, in Suffolk,” (p. 2) という風に、どこで生れたかということが述べられ、又生れる半年前に亡くなっている父親のことが語られる。父親に会ったことのない語り手は、後年の漠然とした思い出として、“my first childish associations with his white gravestone in the churchyard” (p. 2) という様に、父親の墓石から子供っぽい連想を働かせたことを語っている。具体的にどのような連想かは語られていないが、その内容のヒントは *Great Expectations* の Pip が、やはり墓石の文字や形から、亡き両親や兄弟のことをいろいろ空想したことの記述のなかにあるようである。

その後、自分が生れてくる前後のことが、母親、Peggoty、伯母 Betsy Trotwood、医師などの人物たちの言動と共に、語られる。女の子を望んでいた伯母と医師とのやり取りには滑稽さがあり、語り手が本書を刊行するつもりはなかったと言ってる割には、読者を十分意識しての novel であることを痛感させる。

この物語全体を通して、“I remember” “I rcollect” “I look back” “remembrance” “recollection” といった記憶・回想にまつわる表現が無数に出てくる。これらの言葉は物語の中で行動する David と物語る David との距離を常に意識させる。しかし、完全に突き放して、冷静に描かれているかということ、そうでもなく、主人公の喜怒哀楽は直接伝わってくる。

語り手は、自分が「記憶力の良さ」(“a strong memory”) と、また「観察力の細かさ」(“a close observation”) (p. 13) とを兼ね備えた子供であったことを自信をもって語っているが、これは自分自身の経験から得た結論であるとしている。そこで、彼が、幼年時の記憶の中で、特に明瞭に思い出すのは、母親と Peggoty と過ごした楽しかった頃のことである。第2章 *I Observe* の冒頭の記述はそういった記憶力の良さが窺い知れる。

The first objects tht assume a distinct presence before me, as I look far back, into the blank of my infancy, are my mother with her pretty hair and youthful shape, and Peggoty, with no shape at all, and eyes so dark that they seemed to darken their whole neighbourhood in her face, and cheeks and arms so hard and red that I wondered the birds didn't peck her in preference to apples.

I believe I can remember these two at a little distance apart, dwarfed to my sight by stooping down or kneeling on the floor, and I going unsteadily from the one to the other. I have an impression on my mind I cannot distinguish from actual remembrance, of the touch of Peggoty's forefinger as she used to hold it out to me, and of its being roughned by needlework, like a pocket nutmeg-grater. (p. 13)

幼児期の最初の記憶が母親と彼女が信頼している女中であることは当然であるが、それにしても、視覚の不思議さで二人が矮小化して見えることや、Peggoty の人差し指の感触とそれが荒れていたことまで生々しく覚えているとは驚きである。もっとも、語り手の背後に作者 Dickens の姿が意識されてしまうのであるが。少年時でもこの記憶力が実証されるエピソードがある。Salem House 学校時代、Steerforth に、*Peregrine Pickle* (1751, Tobias Smollett (1721-71) 作) を始め過去に読んだ物語りを思い出せるかと聞かれて、David 自ら、自信をもって、“Oh, yes, I replied; I had a good memory, and I believed I recollected them very well.” (p. 92) と答えている。

David の memory は観察力と記憶力の良さに支えられているばかりでなく、快活さをもって語られる。かつての少年の心が鮮やかに蘇る。George Orwell (1903–50) が少年の頃 *David Copperfield* を読んだときに、この本は子供によって書かれたのではないかと思った⁽²¹⁾ というのも納得がいく。J. Lucas は、この Dickens の功績を、“I know of nothing in English literature to equal the clarity, immediacy and general rightness of the narrator’s early years”⁽²²⁾ と評価している。

記憶と母親との関係が第 8 章と第 9 章には顕著に表われている。David は楽しい思い出と悲しい思い出、母との二重の別れを、やはり “I remember” やこれに類似した表現を多用しながら、回想する。

第 7 章の最後のところで、Creakle’s school が休暇に入り、母や Peggoty の待つ家に帰るのを心待ちにしている David の様子が、未来から現在のほうへと、丁度川が上から下へと流れて来るように、時の移り行く様が語られる。“months” から “to-night” へと変わっていく様が、期待とアクシデントか何かの理由で家に帰れなくなるのではないかといった不安との交錯の内に綴られる。

I well remember though, how the distant idea of the holidays, after seeming for an immense time to be a stationary speck, began to come towards us and to grow and grow. How from counting months, we came to weeks, and then to days; and how I then began to be afraid that I should not be sent for and when I learnt from Steerforth that I *had* been sent for, and was certainly to go home, had dim forebodings that I might break my leg first. How the breaking-up day changed its place fast, at last, from the week after next to next week, this week, the day after to-morrow, to-morrow, to-day, to-night — when I was inside the Yarmouth mail, and going home. (p. 106)

そして、第 8 章で、David は家に帰り、母の歌う声を聞いたとき、懐かしさで胸を一杯にする。その声の懐かしさは、まさに “music of memory” をもって語られる。

God knows how infantine the memory may have been, that was awakened within me by the sound of my mother’s voice in the old parlour, when I set foot in the hall. She was singing on a low tone. I think I must have lain in her arms, and heard her singing so to me when I was but a baby. The strain was new to me, and yet it was so old that it filled my heart brimful; like a friend come back from a long absence. (p. 109)

しかし、David の期待はいささか裏切られる。それは母と Murdstone との間に生れた half-brother である赤ん坊に向かって歌われていたのである。この事態は、母が Murdstone と結婚したことによって予め用意されていたのである。この場面は、マルセル・ブルースト (1871-1922) の『失われた時を求めて』(1913-27) において、主人公マルセルが、夜寝る前に、母親が、階上の自分の部屋に来てお休みのキスを心待ちにしているときの母に対する思い出を語る部分と、相通ずるものがある。

そして、David は赤ん坊が眠った後、母親の傍らでの幸福な時を過ごす。

I crept close to my mother's side, according to my old custom, broken now a long time, and sat with my arms embracing her waist, and my little red cheek on her shoulder, and once more felt her beautiful hair drooping over me — like an angel's wing as I used to think, I recollect — and was very happy indeed. (p. 112)

少年期の楽しい思い出の最後を飾るものとして、“and that evening, as the last of its race, and destined evermore to close that volume of my life, will never pass out of my memory.” (p. 115) というように、その晩のことは David の記憶に強く残る。しかし、夢心地の楽園的時間は Murdstone 兄妹の帰宅時刻10時に近づくにつれて、終らざるをえない。楽しいことの背後には必ずといっていいほど不幸な時が待ち受けている。第8章の最後、David が馬車で立ち去る時、母親が赤ん坊を彼に見せようと差し上げる場面は悲哀に満ちている。

I was in the carrier's cart when I heard her calling to me. I looked out, and she stood at the garden-gate alone, holding her baby up in her arms for me to see. It was cold still weather; and not a hair of her head, nor a fold of her dress, was stirred, as she looked intently at me, holding up her child. (p. 121)

これに続く “So I lost her.” という表現には、ただ単なる一時的な別れではなく、本人の意思に関わりなく、母親からの精神的自立を余儀なくされていることが含まれている。更に語り手は、彼女の死による離別・喪失をも予告している。その晩眠っている時に、“holding up her baby in her arms” という母に関する表現が再び表われる。

第9章は、母親と赤ん坊の死と少年の悲しみが語られ、この小説全体でも、最も強い感動を与える章である。何故これ程までに感銘を与えるかという理由の一つは、あの言い尽された感のある Blacking Warehouse の記憶にまで遡る。伝記作家 Alexander Welsh は、「blacking warehouse の秘密の思い出によって Dickens の人生と虚構の大部分の説明が

付く。」⁽²³⁾とまで言っている。つまり、Dickensの小説に繰り返し出てくる自己憐憫や、自分が死んでしまっているか、非行に走っていけば、大人たちにとってよかったのだという子供らしい感傷の説明がつくというのである。⁽²⁴⁾第9章の最後で、幼い弟を抱いて眠る母のことが語られる。

The mother who lay in the grave, was the mother of my infancy ; the little creature in her arms, was myself, as I had once been, hushed for ever on her bosom.

(p. 133)

母の腕に抱かれているのは、Davidの幼い弟であると同時に、彼の願望を投影した彼自身の姿でもあるのだ。

いささか先回りしてしまったが、批評家たちが絶賛している、Davidが母の死を告げられる場面へと戻る。この章には、記憶、時と変化、死が典型的に表われている。章のタイトルに *I have a Memorable Birthday* とある通り、記憶すべきまさに皮肉な日になる訳であるが、Davidは大きな悲しみの記憶に小さな記憶は呑み込まれてしまうと、この日を、例の“remembrance”を用いつつ語り始める。Davidの母の死はMrs. Creakleによって婉曲的に伝えられる。彼女は知らせをすぐには伝えずに、世の中は日々変わるというような一般論から話し始める。Davidが相手の態度と言葉から次第に母の死を察知する場面は、少年の悲しみが直に読者の胸に伝わり秀逸である。

‘You are too young to know how the world changes every day,’ said Mrs. Creakle, ‘and how the people in it pass away. But we all have to learn it, David ; some of us when we are young, some of us when we are old, some of us at all times of our lives.’

I looked at her earnestly.

‘When you came away from home at the end of the vacation,’ said Mrs. Creakle, after a pause, ‘were they all well?’ After another pause, ‘Was your mama well?’ I trembled without distinctly knowing why, and still looked at her earnestly, making no attempt to answer.

‘Because,’ said she, ‘I grieve to tell you that I hear this morning your mama is very ill.’

A mist rose between Mrs. Creakle and me, and her figure seemd to move in it for an instant. Then I felt the burning tears run down my face, and it was steady again.

'She is very dangerously ill,' she said.

I knew all now.

'She is dead.'

(p. 123)

少年の心の移り行く様が生理的肉体的変化を伴って描写される。この場面について、John Jones は、“What piercing genius!”⁽²⁵⁾と絶賛し、“a mist rose between Mrs. Creakle and me”という表現は、DickensとWalter Scott(1771-1832)以外のイギリスの作家ではかくも簡単には出来ないし、“Shakespearian”⁽²⁶⁾であるとまで言い切っている。又G. Thurleyは、Davidの喪失感が正確さと感受性をもって喚起されていると指摘している。⁽²⁷⁾

Davidは悲しみの回想の中にも、悲嘆に打ちひしがれた主人公といった、他の生徒たちの目に映る彼自身を意識している様子を記述している。

If ever child were stricken with sincere grief, I was. But I remember that this importance was a kind of satisfaction to me, when I walked in the playground that afternoon while the boys were in school. When I saw them glancing at me out of the windows, as they went up to their classes, I felt distinguished, and looked more melancholy, and walked slower. (p. 124)

これについて、G. Thurleyは、Davidは近親者を亡くした者の役を演じており、語り手・作者は、悲嘆そのものと悲嘆への意識とを区別して表現している⁽²⁸⁾と指摘している。Davidの母はMurdstoneと結婚後、やつれたり、疲れた感じがして、様子が変わってきている。しかし、母の死を知ったときから、記憶の中の母の姿は、苦しそうな表情から、若い穏やかな苦勞を知らない時代のものに戻ってしまう。語り手の中で、都合のいいように、記憶が変容しているのである。美と醜、甘美なもの苦澁、何れを記憶の中で選別し残すかは誰にとっても明らかである。DavidはPeggotyから母親の最後の様子を聞いた後覚えた不思議な感じを率直に記している。

From the moment of my knowing of the death of my mother, the idea of her as she had been of late had vanished from me. I remembered her, from that instant, only as the young mother of my earliest impressions, who had been used to wind her bright curls round and round her finger, and to dance with me at twilight in the parlour. What Peggoty had told me now, was so far from bringing me back to the later period, that it rooted the earlier image in my mind. It may be curious, but it

is true. In her death she winged her way back to her calm untroubled youth, and cancelled all the rest. (p. 133)

III

David Copperfield も『失われた時を求めて』も共に、一人称で語られる回想形式をとっており、母親との思い出の部分が記憶の始まりと緊密な関係を保っている。例の有名なプチット・マドレーヌを浸した紅茶のエピソードは触覚や味覚や臭覚や視覚など人間の感覚から呼び起こされる記憶という点で、Dickensにも類似した描写があるが、これは後述する。ここでは、Davidとマルセル、Dickensとプルーストの記憶の方法や性質を比較して、その違いを見てみよう。マルセルの育ち暮したコンブレーという場所にまつわる様々なこと、家の庭にある花、スワン氏の庭園の花、川のスイレン、教会、町、近郊の村人とその住い、等々がマドレーヌを浸した一杯のお茶から飛び出してきた訳であるが、Davidにとっては、同じような過去の回想はいとも簡単に蘇るのは述べた通りである。マルセルにとっての過去は難渋した挙句やっと、そのかわり一気に現出する。彼は、過去を思い出すのに苦しんでいる様と、それがいわゆる無意識的記憶によって一挙に解決する瞬間をこう述べる。

この思い出、この昔の瞬間は、私のはっきりした意識の表面にまで到達するだろうか？よく似た瞬間の牽引力が、はるか遠くからやって来て、私の一番奥底のほうで促し、感動させ、かきたてようとしている、この昔の瞬間は？分からない。今はもう何も感じられない、思い出は停止している、多分また沈んでいったのだろうか？そのくらい夜のなかからいつかまた思い出が浮かび上がるだろうか？だれが知ろう？十度も私はやり直し、思い出のほうに身をかかめねばならない。そしてそのたびごとに、そんなものはやめたまえ、お茶でも飲みながら、苦もなく反芻できる今日の倦怠、明日の欲望だけを考えたまえ、と。

そのとき一気に、思い出があらわれた。この味、それは昔コンブレーで日曜の朝（それというのも日曜日には、ミサの時間まで外出しなかったからだ）、レオニ叔母の部屋に行ってお早うございますを言うと、叔母が紅茶か菩提樹のお茶に浸してさし出してくれたマドレーヌのかけらの味だった。⁽²⁹⁾

Dickensの没した翌年1871年に生れたプルーストは、「時」を主役とした壮大な小説を完成させる。*David Copperfield*はDickensの「失われた時を求めて」であると言えよう。*David Copperfield*とよく比較される作品にJames Joyce(1882-1941)の*A Portrait of the Artist as a Young Man*(1916)がある。G. Thurleyの言うように、「Joyceの*Portrait*

は一明らかに—Dickens の作品がなければ生れなかったであろう。」⁽³⁰⁾ Joyce は、内的独白により自伝風に過去を紡ぎだす。Joyce の作品に見出せるのは、芸術家として生きることの自覚と宣言であるのに対し、Dickens の世界は、「Joyce がイデオロギー的に切り離された社会の想像的な生活の中に」⁽³¹⁾ ある。つまり、Joyce の場合、そのアイデンティティが、芸術家として生きることそれ自体にあるのに対し、Dickens の場合、David が、社会の中でアイデンティティを確立していく過程が描写されている。

ブルーストや Joyce の回想と比べて、Dickens の回想の特質といったものはどのようなものであろうか。 *David Copperfield* の中にわざわざ「回顧」という見出しの付いた章が4つある。第18章 *A Retrospect*, 第43章 *Another Retrospect*, 第53章 *Another Retrospect*, それに最終の第64章 *A Last Retrospect* である。これ以外の章でも、“I remember” およびその類似した表現によって、しばしば過去の回想を読んでいることを意識させられているのに、なぜ敢えてこういったタイトルを付けたのであろうか。他の章が過去形で叙述されているのに対し、これらでは現在形が用いられ、語り手 David の語っている現在の存在が近くに感じられ、過去は懐かしい過去として距離をもって語られる。具体的には、第18章では少年期の恋や喧嘩相手のこと、第43章と第53章では Dora との結婚と彼女の死、第64章では語り手の家族や知己の近況が語られる。

これら *Retrospects* から、過ぎ去った時が、「時の流れ」(streams of time) と「人生の路」(road of life) の比喩⁽³²⁾ をもって語られ、家族知人だけでなく、語り手 David 自身の幻影をも、距離をもって見られていることが分かる。しかし、「時の流れ」も「人生の路」も暗転し、消失してしまうかに見える時がある。第53章の最初で、David は妻 Dora を、“a figure in the moving crowd before my memory” (p. 764) と距離をおいて表現しておきながら、最後には、“Darkness comes before my eyes; and, for a time, all things are blotted out of my remembrance.” (p. 768) と、いかに“the moving crowd”の一人であるといっても、亡き妻への追憶は、語り手の心の琴線に強く触れ、時の流れの語りの中で乱れがあることを示している。

David は、妻の死、母の死、Murdstone 兄妹からの酷い仕打ち、Murdstone and Grinby's warehouse での屈辱的な思い出、それに友人 Steerforth と Ham の死など、幾多の辛い経験をやるが、これらから逃避せずに、何とか回想し書こうとした。これに対し、novelist としての David の alter ego ともいえるべき少々気が変だといわれている Mr. Dick の記憶は中断する。Mr. Dick も David と同じように個人的な肉親の不幸を経験する。彼を同宿させている Betsy Trotwood によると、彼は、気に入っていた妹が結婚し、夫のために惨めな目に会わされたことや、兄から不親切に扱われているという気持ちやらで熱病に罹り、苦しんでいるのだという。

Mr. Dick は、David が“personal history”を書いているのと同じように、彼の

“Memorial”, つまり伝記を書こうとしている。彼は自分の病気を歴史を語ることによって “allegorical way” (p. 205) に語ろうとする。その内容とは世の大事件とか、大法官とかいう大人物の事を書こうとしているのであるが、Charles I のところになると挫折してしまう。彼は Charles I の切り落とされた首のところに差し掛かり、それを自分の執筆している歴史から取り除こうと難渋し、また書きおなす。この作業はどうやら無限に続くようである。

‘Do you recollect the date,’ said Mr. Dick, looking earnestly at me, and taking up his pen to note it down, ‘when King Charles the First had his head cut off?’

I said I believed it happened in the year sixteen hundred and forty-nine.

‘Well,’ returned Mr. Dick, scratching his ear with his pen, and looking dubiously at me. ‘So the books say; but I don’t see how that can be. Because, if it was so long ago, how could the people about him have made that mistake of putting some of the trouble out of *his* head, after it was taken off, into *mine*?’ (p. 202)

彼の伝記は、個人的な家族にまつわる不幸な過去を覆し、出来ればやり直したいという空しい悲願の譬喩であろうか。しかし、個人的なものであれ歴史的なものであれ、覆したり、元に戻したりすることは出来ない。結局、Charles I の切り落とされた首の事を書いた原稿用紙は、切り張りされて、彼の上げる凧の紙となり、空を舞うことになる。一見喜劇的であるが、この男の悲劇を感じず。ここには、記憶と歴史と物語との関係についての重要な問題が提起されているのではなかろうか。Mr. Dick にとって、David の1654年という答えは単なる歴史年表上のことであって、彼の “Memorial” の中では、その意味を理解できないのである。Mr. Dick はただこの Charles I を伝記から取り除こうと、10年以上努力しているが、なかなか実現できないでいる。

Mr. Dick ばかりでなく、*Great Expectations* 中の Miss Havisham も過去のある時点、即ち彼女の婚礼の準備が調いかけたところで婚約者の裏切りを知った9時20分前に、何度となく舞い戻っている。また *Tale of Two Cities* (1859) 中の Doctor Manette も、歴史と時の流れの認識を迫られると、記憶の中の唯一救われる時、つまり投獄されていた時にすべてを忘れさせてくれた Lucie のことだけを思って婦人用の靴作りに専念していた時に戻ってしまう。これらの人物たちは、時と変化を受容するのを避けている点で似ている。

Mr. Dick にとって Charles I が歴史であれば、記憶されて然るべきものであるのかどうか疑問なのである。結局、そこに差し掛かっては中断してしまうのである。これは書き手の歴史への態度による。Malcolm J. Woodfield は、Mr. Dick の Charles I の記憶と

Dickens と David の記憶とを結び付け、「書くことが一連の新たな始まりであるということとは、歴史が自己あるいは他人についてのものであれ、自己の変形としてのものであれ、特に歴史的著述について当てはまる。Mr. Dick の歴史上の King Charles の記憶と Dickens の David Copperfield の記憶についても同じことが言える。双方の作家の場合、彼等の歴史とは記念すると同時に追ひ払おうとする手段なのである。David は Dickens の Charles I であり、常に物語を妨げ、現在における過去の役割を問題にする新たな始まりを強いてくる。」⁽³³⁾と述べている。 *A Last Retrospect* では、ある人物の半生や一生を急ぎ回想する映画の手法と同じように、語り手に関係のある人物たちが走馬灯のごとく、次から次へと現われては消えていく。ここでも、人生の旅路を歩んでいく語り手自身の姿が見え、人々の声が聞こえるというように、感覚による記憶が明確に述べられている。

And now my written story ends. I look back, once more — for the last time — before I close these leaves.

I see myself, with Agnes at my side, journeying along the road of life. I see our children and our friends around us; and I hear the roar of many voices, not indifferent to me as I travel on. (p. 874)

これ以後、伯母の Betsy Trotwood, Peggoty やほかの人々の姿が見え、声が聞こえ、現われては消えていく。

川の流れのように進む時の流れと人生の道はやがて海=死に至る。「*David Copperfield* における道も川も共に海に通じている」⁽³⁴⁾という G. Thurley の指摘は、この点で興味深い。海が死のイメージをもっているというのは、*Dombey and Son* (1846-48) で既に扱われている。*Little Dorrit* においても、Arthur Clennam が人生の苦悩に倦んで、“it might be better to flow away monotonously, like the river,”⁽³⁵⁾ という感慨をもって眺めた川もやがて海に至る。

Retrospects では、語り手 David 自身が、傍へ退いて、過去の自分を見返している。Dickens の記憶の特質なり、メカニズムといったものが窺われる部分を第18章から引用しよう。Doctor Strong の学校で首席であった Adams が学校を去り、かつては眩いばかりの高さとして見ていた首席に自分がついて、かつての自分を思い起こして、他の生徒たちを見ている場面である。ここで注目すべきは、回想して見られる自分があたかも別人のように眺められている、そのプロセスとも言うべきものが描かれている点である。

Time has stolen on unobserved, for Adams is not the head-boy in the days that are come now, nor has he been this many and many a day. Adams has left the

school so long, that when he comes back, on a visit to Doctor Strong, there are not many there, beside myself, who know him. Adams is going to be called to the bar almost directly, and is to be an advocate, and to wear a wig. I am surprised to find him a meeker man than I had thought, and less imposing in appearance. He has not staggered the world yet, either ; for it goes on (as well as I can make out) pretty much the same as if he had never joined it.

A blank, through which the warriors of poetry and history march on in stately hosts that seem to have no end — and what comes next ! *I* am the head-boy, now ! I look down on the line of boys below me, with a condescending interest in such of them as bring to my mind the boy I was myself, when I first came there. That little fellow seems to be no part of me ; I remember him as something left behind upon the road of life — as something I have passed, rather than have actually been — and almost think of him as of some one else. (p. 268)

ここには、「時」の無意識のうちの経過と、その経過のうちにかつては高みにいた人物 Adams が、普通に見え、相も変わらず進行している世の中における彼の存在の希薄化の中に、また今度は David 自身が憧れの的だった首席の座に位置し、後輩の少年たちを見、その中に過去の自分を見るという重層的な見方の中に、青春期の David の変化と成長とが見て取れる。直線的に流れる時間の中で、青春期の David の現在の視座に立てば、Adams の姿は彼の未来のバリエーションであろうし、後輩たちの姿に重ねあわされた自分の姿は過去の自分であろう。ここには、ある人間の過去、現在、未来とが同時に表出されているといえないであろうか。更に、“Time has stolen on unobserved” という、つまり時はいつの間にか過ぎ行くものであるという、誰もが気付いていても表現しえなかった Dickens 独特の「時間」感覚が人物の描写を通じて物の見事に表現されている。

G. Thurley は、この無意識のうちの時の経過の表現において、Dickens の作品は、回想についての他のすべての小説を凌駕する⁽³⁶⁾と述べている。即ち Joyce の回想された事実は美術館の中に飾られているようであるし、プルーストの場合、Dickens にずっと近いのだが、昔の経験を再喚起するために膨大な過去の想起力が現在のいろんな象徴に依存しており、Joyce もプルーストも、現在の自己が構成されている別々の自己を並べる為に回想を活かすのに、Dickens ほど成功していない、というのである。⁽³⁷⁾

Joyce とプルーストと比べて、Dickens が優れているかどうかは分からないが、比べることによってその特質は浮かび上がってくる。

例の有名なプチット・マドレーヌを浸した紅茶のエピソードは触覚や味覚や臭覚や視覚など人間の感覚から呼び起こされる記憶という点で、Dickens にも類似した描写があるの

で、幾つか挙げてみる。第26章で、語り手 David が、自分がかつて Dora に心奪われ、温室で話を交わすことができたときのことを、ゼラニウムの匂いととも思い出している。

The scent of a geranium leaf, at this day, strikes me with a half comical, half serious wonder as to what change has come over me in a moment ; and then I see a straw hat and blue ribbons, and a quantity of curls, and a little black dog being held up, in two slender arms, against a bank of blossoms and bright leaves.

(p. 396)

既に引用した文の中に含まれている，“I have an impression on my mind I cannot distinguish from actual remembrance, of the touch of Peggoty’s forefinger as she used to hold it out to me,”にも、又、第30章における Barkis が亡くなりそうな時の、Emily の手の冷たさについて語られる，“The coldness of her hand when I touched it, I can feel yet.” (p. 443) という部分にも、そういった感覚が記述されている。Dickens の他の作品、例えば、*Great Expectations* の第19章においても、語り手 Pip が、“the smell of a black-currant bush has ever since recalled to me that evening”⁽³⁸⁾ と、同じく、ブルースト風に過去を回想している。H. Miller⁽³⁹⁾ やポール・リクール⁽⁴⁰⁾ が指摘するように、ブルーストの時間は、現在と過去とが合体することによる時の超越である。これに対し、Dickens の時間は、川の流れのごとく過ぎ去っていくもので、過去は過去として取り戻すことは出来ないものであるというものである。では過去は、現在とは何の関わりもなく、断絶しているのであろうか。過去は、それをどのように受け止めるかによって、意味をもってくるのではなからうか。Betsy Trotwood の次の言葉の中に、現在と過去と生き方との関係についての答えがあるようだ。

‘It’s in vain, Trot, to recall the past, unless it works some influence upon the present.’

(p. 347)

これは、過去を思い起こすとは、ただ単に過去を郷愁として捉えることでも、過去に固執しすぎることでもなく、現在の生き方に、何らかの貢献をもたらすようなものでなければならないということであろう。同じく、語り手 David の記憶も過去との持続の上に成り立っている必要がある。事実 David の記憶の数々は断片的にあるのではなく、前に語られたことと後に語られることが互いに関係付けられている。Betsy Trotwood の言葉は、言い換えれば、過去が過去として成り立つのはそれに対する現在の人間の態度によるということであろう。

Betsy Trotwoodとは全く異なって、過去を現在に生かして過去を思い出すどころか、過去の記憶自体を消そうとする男がいる。DickensのChristmas Bookの一つとして書かれた*The Haunted Man* (1848)中の化学者Redlawは、惨めな不幸な過去の幽霊に取りつかれる。彼は、惨めな過去を消さんがため、幸せなことも悲しみももろともに、過去の記憶すべてを消すことを、この霊と契約する。しかし、この記憶の消滅とともに、彼は自分が一体何者であるのか、その存在自体が定かでなくなる。つまり記憶を失うということは、彼自身のアイデンティティすら失うことになる。Barry Westburgの言を借りれば、“Abolish the past, and you abolish the present and future as well.”⁽⁴¹⁾ということになる。しかし、クリスマス物の教訓として、彼はある女性の助けを借りて、記憶を回復することになる。この惨めな過去の幽霊は、Dickensのtraumaと理解できなくはない。この話が、*David Copperfield*連載開始の前年に書かれたことは、過去の記憶に対するDickensの一つの考え方を示していると言ってよいであろう。この話の最後の言葉、“Lord, keep my memory green.”という記憶への肯定的な祈りは、*David Copperfield*における“remember”なり、“remembrance”なりの言葉の執拗なまでの繰り返しと無縁ではなさそうである。

IV

一市民に過ぎないBetsyですら時間に対してこれくらいの見方はしていたわけであるが、ヴィクトリア朝の時間感覚・意識とはどのようなものであったろうか。Dickensが「ヴィクトリア朝の時間への深い関心を共有していた作家」⁽⁴²⁾であるのは疑いの余地はない。*David Copperfield*が一巻本として出版された1850年は、Wordsworth (1770–1850)の自伝的な長詩*Prelude* (1850)とTennyson (1809–92)の亡き人への追悼の詩*In Memoriam* (1850)とが出版された年でもある。過去の表現・捉え方に違いこそあれ、いずれの作品も過去や幼少年時代へ目が向いている。

DickensはTennysonの影響を受けており、⁽⁴³⁾二人の類似は明らかである。次の第44章からの引用は、Doraとの結婚生活とそれへのDavidの正直な感想である。

The old unhappy loss or want of something had, I am conscious, some place in my heart ; but not to the embitterment of my life. When I walked alone in the fine weather, and thought of the summer days when all the air when all the air had been filled with my boyish enchantment, I did miss something of the realisation of my dreams ; but I thought it was a softened glory of the Past, which nothing could have thrown upon the present time. I did feel, sometimes, for a little while, that I could have wished my wife had been my counsellor : had had more character and

purpose, to sustain me, and improve me by ; had been endowed with power to fill up the void which somewhere seemed to be about me ; but I felt as if this were an unearthly consummation of my happiness, that never had been meant to be, and never could have been. (p. 646)

John Lucasはこの箇所について、“I hear Tennyson and Wordsworth just beneath the surface of Dickens’s prose: the passage has so much to do with ‘thinking of the days that are no more’ and feeling regret for something that is gone, the glory and the dream.”⁽⁴⁴⁾と述べ、「最早ない日々を思い返す」点での類似性を指摘している。しかし、語り手は、ただ時の過ぎ行くことへの悲しみばかりでなく、過去の栄光や夢の実現へ不足感を抱いたことへの悔恨の念と、夢から覚め実生活の責務を果たす必要性の自覚をもつに至ったことをも、上記に続く段落の中で、“I write the exact truth.”と言う様に内なる声をもって語っているのである。

Gilmourによれば、「Tennysonの詩は『過去への情熱』が過去に囚われているかもしれないという認識にいつも付き纏われていた。」⁽⁴⁵⁾という。一方、語り手Davidは、そのような過去への過重な没入とか記憶の重荷といったものから、夢と現実の体験を語ることによって、逃れ、避けようとする。Stephen L. Franklinは「Davidの回想は、Mr. Dickのと違って、病気の兆候ではなく、健康のための診断である、そしてそれらの回想を通じて、彼はBergsonも含めて、たくさんの現代の小説家や注釈者が、内的時間意識の持続においてのみ征服しようと考える、表面的な時の流れの明らかな『不可逆性』を克服している。」⁽⁴⁶⁾と述べ、David / Dickensの回想・記憶のもつ特質を指摘している。

時間の流れの中で、過去の記憶と現在を中心に述べてきたが、この小説には未来からの視点とでも云ったものが予知される。非現実的な女性といわれるAgnes Wickfieldの存在は、記憶と未来について考えさせる。DoraもSteerforthも、それにDavidもmortalなものとして死は免れない。プルーストは、『失われた時を求めて』において、時間を超越しようとした。果たし得たろうか。失われた時は見出された時の中に包含され、「見出された時とは、また見出された死」⁽⁴⁷⁾でもあり、結局、人間は時間の中に呑込まれてしまう。丁度Mr. DickがCharles Iの所から何度も立ち返るように、『失われた時を求めて』の「始まりは、われわれを無限定の昔に送りかえす、というふしぎな特徴をもっていった。物語の結びも、それと別のことをするわけではなく、物語は作家がかきはじめるところで止まる。」⁽⁴⁸⁾生きているかぎり、丁度千夜一夜の語り手のように語り続けなければならない。

*David Copperfield*の終りはangel AgnesがDavidの傍におり、死ぬ時は彼女が天国へ連れて行ってくれることを予示して終る。苦楽を経験し書いてきた作家Davidは「彼の記

憶を組織立て、それらにまとまりを与える」⁽⁴⁹⁾のは外ならぬ Agnes であることを悟るのである。時と変化を受容する者には記憶を紡ぐことの意義を、生きることの意味を反古にしないよう、Agnes を与えられることを Providence によって未来から約束されているのである。しかし、時と変化を受容しても、*Great Expectations* の Pip にとって最早 Agnes のような人物は存在しないし約束されていない。やはり David / Dickens も昔に送り返された別の角度から人生を捉え直し、別の物語を書き始めなければならない。Dickens はその後幾つかの別の物語を書き、何人かの heroes や heroines を創造した。しかし、彼の「序文」で David Copperfield のことを、“a favourite child” と語り、彼に並々ならぬ愛着を示している。読者は David Copperfield にそれぞれの半生を重ね合わせて読めばよい。

Dickens は過去を再構築はしたが、その結果よりも、距離を保ち抑制しつつ、虚構の時間の中で自己を呼び出し、再生する過程、つまり「書くこと」そのものの中に喜びを見出していたようである。*David Copperfield* をめぐって、Dickens の作品を書くのに要した時間、David を中心に流れた作品の中の虚構の時間、そしてわれわれ読者が作品を体験する時間が流れた。失われた時の回復は幻想かもしれぬが、虚構の時間を経験することによって、作者と読者は相対することができる。

[今回は、時の経過のうちに、墮落し滅びる人々、変わらぬ人々、成功する人々について論ずる予定であったが、紙数の都合で割愛した。別の機会に扱う予定である。]

— 註 —

- (1) J. Hillis Miller, *Charles Dickens: The World of His Novels* (1958; rpt. Bloomington: Indiana UP, 1969), p. 152.
- (2) See Alexander Welsh, *From Copyright to Copperfield: The Identity of Dickens* (Cambridge: Harvard UP, 1987)
- (3) See Edmund Wilson, *The Wound and the Bow* (New York: Oxford UP, 1987)
- (4) See Wilson, pp. 6-7.
- (5) Welsh, p. vii.
- (6) David Kellog, “‘My Most Unwilling Hand’: The Mixed Motivations of *David Copperfield*,” *Dickens Studies Annual*, ed. Michael Timko et al. (New York: AMS P, 1991), 20, 57.
- (7) See John O. Jordan, “The Social Sub-text of *David Copperfield*,” *Dickens Studies Annual*, ed. Michael Timko et al. (New York: AMS P, 1985), 14, 61-92.
- (8) John Lucas, *A Study of Dickens’s Novels* (London: Methuen & Co Ltd, 1970), p. 201.
- (9) See Kellog, p. 58.
- (10) *ibid.* p. 59.
- (11) See Robert E. Lougy, “Remembrances of Death Past and Future: A Reading of *David Copperfield*,” *Dickens Studies Annual*, ed. Robert B. Partlow, Jr. (New York: AMS P, 1980), 6, p. 74.

- (12) Welsh, p. 109.
- (13) See Miller, pp. 156-58; Welsh, pp. 180-82; Stanley Friedman, Dickens' Mid-Victorian Theodicy: *David Copperfield*," *Dickens Studies Annual*, ed. Robert B. Partlow, Jr. (New York: AMS, P, 1978), 7, p. 129.
- (14) See Stephen L. Franklin, "Dickens and Time: The Clock without Hands," *Dickens Studies Annual*, ed. Robert B. Partlow, Jr. (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois UP, 1975), 4, pp. 1-35.
- (15) Charles Dickens, *The Personal History of David Copperfield* in *The Oxford Illustrated Dickens* (London: Oxford UP, 1948), 括弧内の数字は頁数を表わす。これ以降の本作品からの引用は本文中に頁数のみを記す。
- (16) Miller, p. 152.
- (17) Barry Westburg, *The Confessional Fictions of Charles Dickens* (DeKalb, Illinois: Northern Illinois UP, 1977), p. 53.
- (18) Friedman, p. 130.
- (19) Westburg, p. 33.
- (20) Charles Dickens, *Great Expectations* in *The Oxford Illustrated Dickens* (London: Oxford UP, 1948), p. 1.
- (21) See George Orwell, *Decline of the English Murder and Other Essays* (Middlesex: Penguin Books, 1965), p. 93.
- (22) Lucas, p. 172.
- (23) Welsh, p. 4.
- (24) *ibid.*
- (25) John Jones, "David Copperfield," in *Dickens and the Twentieth Century*, ed. J. Gross and G. Pearson (London: Routledge and Kegan Paul), p. 135.
- (26) *ibid.*
- (27) Geoffrey Thurley, *The Dickens Myth: Its Genesis and Structure* (London: Routledge & Kegan Paul, 1976), p. 134.
- (28) See Thurley, p. 135.
- (29) マルセル・ブルースト『失われた時を求めて』上 (鈴木道彦編訳, 集英社, 1992), 53頁。
- (30) Thurley, p. 136.
- (31) このJoyceとProustとの比較については, Thurley, pp. 136-139. に負うところが大きい。
- (32) See Thurley, pp. 138-40.
- (33) Malcolm J. Woodfield, "The Endless Memorial: Dickens and Memory/Writing/History," *Dickens Studies Annual*, ed. Michael Timko et al. (New York: AMS P, 1991), 20, 97.
- (34) Thurley, p. 140.
- (35) Charles Dickens, *Little Dorrit* in *The Oxford Illustrated Dickens* (London: Oxford UP, 1948), p. 200.
- (36) See Thurley, p. 139.
- (37) *ibid.*
- (38) Dickens, p. 14.
- (39) See Miller, p. 154.
- (40) ポール・リクール『時間と物語II』(久米博訳, 新曜社, 1988), 第3部, 第4章, 265頁参照。
- (41) Westburg, p. 58.

- (42) Robin Gilmour, "Dickens, Tennyson, and the Past," *Dickensian* 75 (Autumn 1979) , p. 132.
- (43) See Gilmour, pp. 131-141.
- (44) Lucas, p. 195.
- (45) Gilmour, p. 139.
- (46) Franklin, p. 19.
- (47) リクール, 前掲書, 266頁。
- (48) 同上書, 267頁。
- (49) Miller, p. 158.